



去年の四月、朝日新聞の投書欄に和歌山のSさんが傷痍軍人の思い出を 投稿しておられました。

75歳のSさんが、小学生だった頃の思い出ですから、敗戦後のお話です。

お祖母ちゃんと一緒に、緑日で賑わう和歌山の名刹、道成寺にお参りしたとき、境内に傷痍軍人が七、八人集まって、参詣人の援助を仰いでいました。

片腕 片足、両腕のない人。見慣れぬ光景にSさんがシヨックを受けているのを見たお祖母ちゃんが、傷痍軍人について話してくれたそうです。

聞けば、お祖母ちゃんの一人息子は 戦死していて、ただ一人残った娘さんの夫、つまり娘婿が、Sさんのお父さんでした。

そのお父さんも出征し、爆風で耳をやられて障害者になった。、ということ、Sさんのお父さんも、傷痍軍人だったのです。

お祖母ちゃんは傷痍軍人たちに 些少の施しをしたあと、怒りを込めて、こう

言ったそうです。

「若いもんをこんなにした責任者と、戦死した犠牲者(自分の息子)を一緒くたに祀つとるから(靖国神社は)ややくしんや」

\*

作家の 向田邦子さんのお祖父ちゃんは建具職人で、日露戦争の生き残りでした。それもある二〇三高地の弾の雨を潜って生き残ったお人だったそうです。

二〇三高地の撃ち合いが激しくなってくると、居職(自宅で仕事をする職業)の兵士は、上官の目を盗んで、塹壕から足を出し、高々と挙げて叫んだそうです。

「撃つてくれエ！ 撃つてくれエ！」

向田さんは、「足の一本やそこら失くしても、生きてさえ帰れば、手がある限りやつてゆける」ということだろう。

と結んでいました。敵を殺してでも、自分の命を捨てても 国を守るなどとは考えず、とにかく生きて帰って、自分の腕でメシを食って行く。、という

職人魂もさることながら、「国民皆兵」や「徴兵制」の理不尽さに心が痛みます。

\*

戦時中の奉仕活動の中で「傷痍軍人の慰問」は重要な奉仕活動でした。

一九三九年(昭和14年)、私が通っていた徳島駅前、寺島幼稚園でも傷痍軍人の慰問が恒例となっていて、慰問のための小道具が常に用意されていたのです。

男の子が お遊戯に使う鉄砲(夜店の射的の鉄砲)や、鉄兜(兵士のヘルメット)、女の子が着る看護婦さんの白衣。、といったアイテムが、ちゃんと揃っていました。

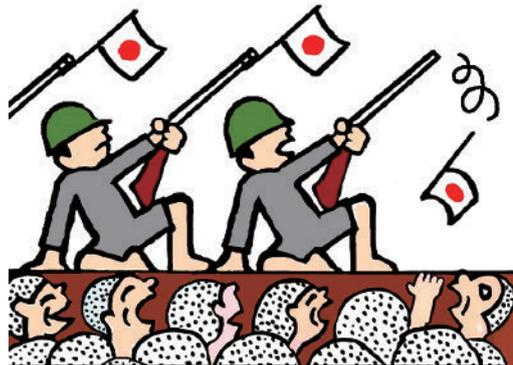
さすが戦時中の幼稚園です。寺島幼稚園児 慰問団は病院内の小さな舞台の上で お遊戯を披露して療養中の傷痍軍人を慰めようという趣向でした。

客席には、包帯やギプス、松葉杖が目立つだけでなく、片腕の人や片脚の人もいて、幼稚園児の私は、ちょっと怖かったですねえ。

私の役目は、兵隊さんの扮装をして、仲間の園児と

「僕は軍人」という童謡に合わせて お遊戯を踊って見せることでした。

先生が準備し指導してくれましたが、私たち男の子が踊るときに持つ銃の先端に、日の丸の小旗が括りつけであり、お遊戯の最後には、立膝の姿勢で銃と日の丸を高々と掲げ、大見得を切る手筈だったのです。



ところが、ラストの決めポーズの直前、私の鉄砲に結びつけてあった日の丸がポテンと落ちました。

律儀な私は慌てふためき、取り繕おうと四つん這いで旗を拾うわ、紐を探すわで。、もう客席は大笑い。

この私の周章狼狽ぶりが、いちばん好評だったと後になって聞きました。

最後の見得を切り損ねたあのお遊戯の「振り付け」は、全く覚えていないのですが、「歌」の方は、メロディーも歌詞もよく覚えています。

♪

僕は男だ 軍人だ  
鉄砲肩に鉄兜  
塹壕 跳び越え突撃するぞ  
タンクは素敵だ  
騎兵もいいな  
僕は断然 陸軍だ

もし今の私が、入院中の傷痍軍人で、痛みや障害に苦しんでいるとき、こんな歌を聞かされて、目の前で兵隊の恰好をした ガキが、鉄砲を持ってピョンピョコ跳ねたり 踊ったりしたら、きつとウンザリするに違いない。

しかし、あのとときの兵隊さんたちはニコニコ笑顔で拍手してくれました。時代が時代だっただけに、時代がそうさせたのです。もう あんな時代は来てほしくないですねえ。